

階層イメージと社会の不平等性の認知*

渡 邊 勉**

1. 社会の不平等化と階層イメージ

1990年代の後半以降、日本では格差社会論が注目を集め、多くの論争がおこなわれるようになった。議論の中心は、社会的格差は存在するのかどうか、あるいは格差は広がってきているのかといった格差の実態に関する議論や、格差は良いのか悪いのかといった格差の規範的議論であった(文春新書編集部編 2006)。つまり関心の中心は、もっぱら格差の実態にあり、そして実態としての格差をどのように是正すればいいのかという規範的議論であったといえる。

しかしなぜ、90年代後半以降、格差社会論がこれほどまでに注目されてきたのだろうか。その理由を考えると、多くの論者はおそらく、実態としての格差の増大によって格差が可視化され、それによって格差社会に人々が関心を寄せるようになってきたのだと、暗黙のうちに考えていたのではないかと思われる。しかし、水牛(2006)が、「格差社会をめぐる論争が、事実そのもの以上に、人々の将来への不安心理を反映したものだということを考えさせる」と指摘するように、実態とは別に人々に格差を意識させるメカニズムが本当はあるのかもしれない。佐藤(2006)は、90年代後半に、格差の拡大以上に、人々の「不平等感の爆発」がおきたことを指摘している。つまり、「実態としての格差」とは別に「意識としての格差」の存在を指摘する。そして、佐藤(2009, 2011)は、人々にとって、測定されることによってはじめて明らかにされる機会格差の実態より、階層帰属意識の分布のようになりやす

い事実のほうが、社会の格差の実態をあらわしているとも指摘している。それは、社会の格差というものが、研究者によって発見されるものとしてではなく、市井の人々によって認識された社会像としてあらわれていることこそが、政策論議へとつながる格差社会論においては重要なのだということである¹⁾。

一方、階層意識研究において、轟(2011)は、階層意識論の課題が単に、意識の階層性を発見することにあるのではなく、階層構造への再帰性を理論的に解明することであり、それこそが重要であると指摘している。つまり、階層意識研究は、意識から行動への道筋をつけ、行動が階層の再生産、変動とどのように関連しているのかを明らかにすることが研究課題として求められているのである。格差社会論に引きつけるならば、社会に対する不平等感がどのように形成され、それが階層社会の評価にどのように結びつき、社会の変動に寄与するのかを明らかにすることが重要な課題なのである。

本稿の問題意識もここにある。階層帰属意識などの、社会の中における自己に関する意識だけでなく、社会全体に対する意識・イメージの形成メカニズムを明らかにすることで、社会自体の評価のメカニズムを明らかにしていくことが、本稿の目的である。そしてこうした社会自体の評価は、社会がどうあるべきかという規範的な議論、さらにはそのためにどうするかといった行動にもつながる契機を持っている点で、階層構造の再帰性の議論とつながっている。

ここでもう一つ、本稿の研究を進める上で有効となる重要な視座について述べておきたい。

*キーワード：ファラロ=高坂モデル、階層イメージ、社会的不平等、準拠集団、ジニ係数

**関西学院大学社会学部教授

1) 佐藤香(2008)は、格差や不平等を感じる人々がどのような人なのかを明らかにする分析をおこなっている。

階層意識研究の中でも最も中心的な研究である階層帰属意識に関する研究は、1990年代後半以降の格差社会論に呼応するように、リバイバルしている(吉川(1999)、数土(2009, 2010)など)が、その中で取りあげられる重要な分析枠組みの一つは、準拠集団論である(星 2000、小林 2004、数土 2010、前田 2011)。社会の認識や評価を、我々は全体社会を直接観察することから導いているというよりは、準拠集団のような中間集団を媒介とすることによって、全体社会を見ているのではないかという視座を持つ研究群である²⁾。こうした考え方自体、社会があたかも勝ち組と負け組、富裕層と貧困層といった形で分割されているという格差社会論の産物なのかもしれないが、実際に準拠集団論に基づいた階層帰属意識の説明は成功しており、分析概念としての有効性が確かめられている³⁾。そこで、本稿においても、準拠集団のアイデアを援用することで、分析を進めていくことが有効であると考えます。

具体的に、本稿では、次のような課題に焦点を当てて議論していきたい。

第1に、準拠集団に属する個人は、社会の構成、分布についてどのようなイメージを形成するのか。

第2に、そのイメージに従うならば、個人の階層帰属意識はどのように導出され、社会全体としてどのような分布となるのか。

第3に、さらに社会の分布のイメージから、個人々にはどの程度社会が不平等化⁴⁾しているか見えているのか。

第4に、このように導出される階層帰属意識、社会の不平等化に対する意識は、準拠集団の構成や分布の変化によって、どのように変化するのか。

これらの問いに答えていくために、我々は、階層帰属意識の数理モデルであるファラロ=高坂モ

デルから出発する。ファラロ=高坂モデルは、中意識の肥大化を説明するモデルとして高い評価がなされているが、それと同時にこのモデルは、社会階層のイメージを演繹的に導出できるという点で優れている。その優位点を考えたとき、社会的格差や不平等に対する人々の認知がどのようなメカニズムで生成されるのかに焦点をあてる本稿の目的からすると、ファラロ=高坂モデルを起点として検討することが有効である。

2. 社会の不平等の認知モデル

本稿では、ファラロ=高坂モデルの階層イメージモデルをベースラインモデルとし、準拠集団論をふまえたモデルに拡張する。その上で、まず階層帰属意識の導出のメカニズムをモデル化する。さらに、社会の不平等を人々がどのように認知するのかをモデル化することで、社会の実態と人々の不平等の認知の関係について議論していく。

2.1 ファラロ=高坂モデルの概要

まずは本稿の出発点となる、ファラロ=高坂モデル(以下、FKモデル)について簡単に説明しておくことにしたい⁵⁾。

今、社会が多次元な階層構造 S を持っており、この構造が r ランクによって構成される s 個の次元で作られているとする ($r \geq 2, s \geq 2$)。この多次元階層構造 S ($r \times s$ システム) は、辞書体式に順序づけられており(公理1)、時間的に変化しない(公理2)。個人はこの構造の中で他者と相互作用する(公理4)が、その中で、他者の属するランクを線形的に順序づけられた次元の諸特性の上位から下位に向かって順番に点検し、他者が自分より上か、対等か、下かが判明するまで点検をおこなっていく(公理6)。個人は、初期イメージとして、自己の地位セットのみで構

2) 浜田(2001)石田(2011)は、満足度について、準拠集団論から検討している。

3) 自己の所得の相対的位置について、準拠集団に基づいて判断していることが調査研究によって明らかにされている(飯田 2009, 2011)。

4) 人々の不平等感は、大きく2つに分けることができると考えられる。第1に、個人的な不平等感であり、自分が他者に比べて不平等な状態におかれているという場合に感じる不平等感である。第2に、社会的な不平等感であり、社会全体を見渡した時に不平等な社会状態である場合に感じる不平等感である。

5) FKモデルについては、Fararo(1973)、Fararo and Kosaka(2003)、Kosaka and Fararo(1991)、高坂(2006)などを参照。

成される社会をイメージしている（公理7）が、他者との相互作用の中で、他者の地位セットが、1) 彼がすでに抱えているイメージの中に表現されている場合は、イメージは変化しない。2) 彼が抱えているイメージの最高地位セットよりも高いとき他者の地位セットが新たにイメージの中の最高位の地位セットとなる。3) 彼が抱えているイメージの最下位の地位セットよりも低いとき、他者の地位セットが新たにイメージの中の最下位の地位セットとなる。4) 彼の抱えているイメージの中の任意の2つの地位セットの間に位置するとき、他者の地位セットが両者の間に挿入される（公理8）。

このようにしてイメージされる階層イメージは、社会階層の構成イメージと分布イメージを作り出す。つまり、構成イメージとは、一次元上に分割される階層カテゴリーの集合を指し、分布イメージとは各階層カテゴリーの人口分布を指している。

社会の不平等に関する認知は、この階層の構成イメージと分布イメージによって形成される⁶⁾。つまり、社会がどのように区分されており、その中で自分がどこに位置しているのかを知ると同時に、それぞれ区分された階層の人口比率から、どのような分布の形状をしているのかを知る。その分布の形状から、社会の不平等の度合いを評価することができる。

2.2 社会的不平等認知のモデル

前述したように、FK モデルは、階層の構成イメージと分布イメージに分けることができる。それゆえ、社会的不平等の認知モデルにおいても、この2つのイメージを分けて考えていくほうがわかりやすいだろう。

(1) 構成イメージモデル

従来の FK モデルは、他者と出会うことで自己の地位と他者の地位を直接比較することによって階層イメージを構成していた。それに対して、本稿で提示するモデルにおいては、人々は、2段階

で自己の位置を探索していくことによって階層イメージを形成していくと仮定する⁷⁾。つまり、第一に集団間の比較、第二に集団内の比較をおこなう。ここでいう集団とは、準拠集団のことである。準拠集団については、次のような仮定をおく。

[仮定 1]

各個人は認知上の所属集団（準拠集団）を持っている。

個人がどのような集団に所属するのかについては、さまざまな可能性があり得るが、どのようなルールで準拠集団が決まるかは、本稿では詳細に議論することはしない。ただ、一般的には、似たもの同士が集団を形成しやすい。しかし、その一方で、現実の社会において同じ属性の者のみによって準拠集団が形成されるわけではない。例えば、ある地域社会に住んでいる個人を想像してみよう。そしてこの地域コミュニティの集団を準拠集団にすえているとしよう。彼の周りには大卒の人もいれば、高卒の人もいるだろう。しかしその地域が全体に高い進学率であるという場合であれば、大卒の人が多くと推測できるだろう。つまり、各集団はその内部において異質性を持っているものの、他の集団と比較すると、それぞれ異なる集団の特性を持っていると考えることができる。

そして、各個人が準拠する所属集団は1つに限ると仮定する。一人の個人が、複数の集団を準拠集団とすることはない。さらに、実際、準拠集団は個人によって異なる基準や次元によって構成されているかもしれない。例えば、ある者は会社が準拠集団になり、別の者は地域コミュニティが準拠集団になっているかもしれない。しかし本稿では、単純化のため、それぞれの個人は同一の集団分割の基準によって集団を分割し、準拠集団を構成していると仮定する。それゆえ、社会は人々に共有された分割基準によって、複数の集団に分割されている。

6) 分布イメージについては、高坂（1991, 2006）を参照。

7) 前田（2011）は、準拠集団論によって FK モデルを拡張している。

[仮定 2]

各集団は、 r ランク \times s 次元の階層構造を構成している。

各集団は、それぞれその内部に多次元階層構造を有しており、集団内にさまざまな地位セットを持つ人々がいる。仮定 1 でも述べたように、集団はその内部に異質性を内包しており、多様性がある。それはつまり、FK モデルの枠組みで考えるならば、多次元階層構造を持っているということになる。ここで注意しておきたいのは、この r と s の分割基準は、集団間で同質であると仮定している点である。それゆえ、ある集団 A において MMM という階層的地位を持つ個人と、集団 B において MMM という階層的地位を持つ個人は、客観的には全く同じ階層的地位である。わかりやすくいえば、同じ一流大学卒業でも、大企業で働く者もいれば、中小企業で働く者もいる場合がある。つまり、同じプロフィールを持っていても異なる準拠集団に所属することは往々にしてありうるということである。

[仮定 3]

各集団は、その集団の特性をあらわす 1 つの地位セットを持つ。

その集団の平均的地位セットが、集団の地位セットとなる。もちろん集団内の地位セットの分布から集団を特徴づける地位セットへの変換アルゴリズムは、平均値でなくてもよい。ある分布の代表値を求めるアルゴリズムであればよい。その地位セットは、序列づけられる。つまり準拠集団もまた個人と同様に、イメージ上では一次元上に並べることができる。

例えば、 2×2 システムにおいては、客観階層は HH から LL まで 4 つの階層的地位に分かれる。3 つの準拠集団 H、M、L があるとしたとき、この 4 つの階層的地位はそれぞれ準拠集団に配分されている (図 1 参照)。

以上の仮定から、階層イメージを形成するための 2 段階他者比較は次のようにしておこなわれる。

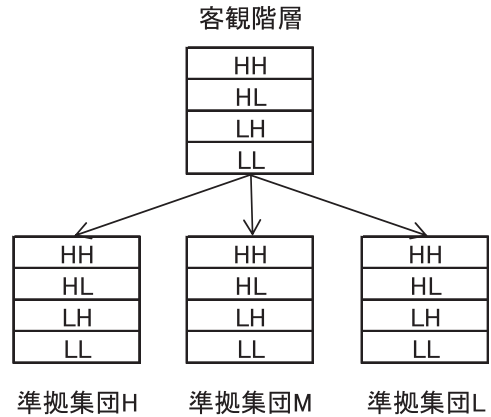


図 1 客観階層と準拠集団

〈第 1 段階〉 準拠集団間の比較をおこなう。

自分の所属する集団が、他の集団の上か同じか下かといった判断を FK モデルと同じように辞書体式検索ルールに従っておこなう。

FK モデルでは、他者との直接の遭遇によって、自己の階層イメージが更新されていくと想定されていたが、本稿で想定している準拠集団間の比較をおこなう際には、他者と実際に遭遇するとは考えていない。イメージ上の他者との遭遇によって自己の準拠集団の位置が更新されていく。ここでいうイメージ上の他者とは、先の仮定 3 に対応する各準拠集団の平均的个人 (集団の地位セット) を指す。もちろんそれぞれの準拠集団の平均的个人のイメージ自体、やはり他者との遭遇の中でつくられているはずであり、その意味では他者との遭遇 \rightarrow 各準拠集団の平均的个人のイメージ \rightarrow 準拠集団の構成というイメージ形成過程を経由していると考えられる。

例えば、会社内で、自分の所属する部署が隣の部署よりも上か下かを判断するために、売り上げや顧客数など、さまざまな次元によって検討しているだろう。このとき、人は、正確とは言えないにしろ、各部署についてなんらかの平均値なり平均的人物を想定することによって、集団間の比較をおこなっていると考えることができる。隣の部署と一人あたりの売上高で比較すると、同じくらいだけ、大型顧客の数ではこちらが優れているとか、顧客からの平均苦情数では下回っているとか、といったように、重要な次元から順に辞書体式に検索をおこない、集団の比較をおこなってい

ると考える。

〔第2段階〕準拠集団内の比較をおこなう。

自分の所属する集団の位置づけが判明すると、次に集団内において、他者よりも上か同じか下かを判断していく。この過程は、FKモデルの検索過程とまったく同等である。それぞれの準拠集団が全体社会とみなされ、その中において、自己の階層的地位を確定させるために、辞書体式検索ルールに従う。

ここで例を挙げることで、モデルの構造を理解していくことにしよう。まず準拠集団の階層構造が3ランク（H、M、L）×2次元の多次元階層構造であるとする。このとき、MMという準拠集団に所属する個人の準拠集団間の階層構造の構成イメージは、図2の「階層イメージ上の準拠集団階層構造」のようになる。これは、単純に3×2システムの階層構造における個人のイメージと一

致する。

さらに、準拠集団MM内のMMMという階層的地位を持つ個人に注目したとき、さらに3×3システムの準拠集団内の階層システムにおけるイメージを構成してみる。これも当然であるが、3×3システムの多次元階層構造の階層イメージに一致している。以上から、この個人は客観階層を11の階層に分割し、下から数えて6番目の階層に所属していると認知することになる。

このように、3×2システムの準拠集団の階層システムと3×3システムの準拠集団内の階層システムにおける地位は、結局のところ、3×5システムの階層構造における階層イメージと一致する。

(2) 分布イメージモデル

先にも述べたように、社会の不平等に関する階層イメージを構成するためには、分布イメージが必要となる。分布イメージをつくるためには、2つの仮定がさらに必要となる。第1に客観階層の分布に関する仮定であり、第2に他者との相互作用に関する仮定である。そこで次に、この2つの仮定について検討していくことにしよう。

客観階層の分布については、最も単純化すればchance societyとして、一様分布を想定するという仮定がある⁸⁾。我々の分析においても、ベースラインモデルとして一様分布から出発する。さらにそこから本稿では、準拠集団の構成比率が変化した場合も考察していくことにする。

[仮定4]
客観階層において、各階層的地位の比率は同一である (chance society)。

次に、他者との相互作用については、すでに高坂（2006）によって社会的距離の定義がおこなわれているが（高坂2006：194-197）、本稿では議論をさらに単純化するために、高坂の定義よりもさらに単純化し、次のように定義する。

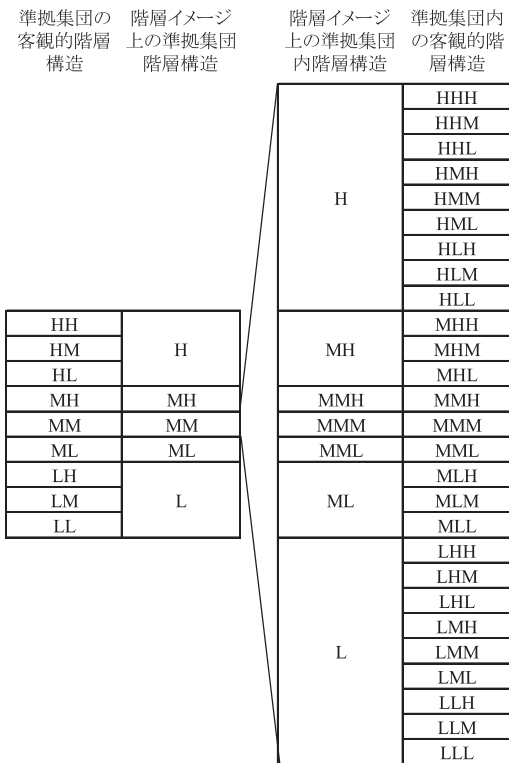


図2 準拠集団を考慮したFKモデルの階層イメージ

8) 高坂（2006：204-211）は、M-アイデアによって、客観階層の分布の変化を表現することで、分布イメージへの影響を検討している。

[仮定 5]

- (1) より上位の次元におけるランクが異なるほど、階層的地位間の距離は遠くなる。
- (2) 準拠集団内において、ある次元 s における同一の階層は、 $s-1$ 次元目以降が異なっても、同等の社会的距離となる。

(1)より、例えば準拠集団内において HHH と HMH との距離（第2次元で異なる）は、HHH と HHM の距離（第3次元で異なる）よりも遠くなる。また (2)より、HHH と HMH（第2次元で異なる）、および HHH と HLH（第2次元で異なる）の間の距離は同じとある。つまり自分が所属する階層と他の階層の間は決定的に異なるが、他の階層間の距離に違いはないと仮定する。

以上の仮定を基に、階層間の距離係数を q とおくことにしよう ($0 \leq q \leq 1$)。準拠集団の次元数を s_1 、準拠集団内の次元数を s_2 としたとき、ある階層的地位の者 i と別の階層の者 j とが準拠集団の階層次元から数えて、 v 次元目で異なっているとすれば、その距離は次のように定義される。

$$d_{ij} = q^{(s_1 + s_2 - v)} \quad (1)$$

ここから、 i と j の相互作用確率は次のように定義される。

$$p_{ij} = \frac{q^{(s_1 + s_2 - v)}}{\sum_{j=1}^n q^{(s_1 + s_2 - v)}} \quad (2)$$

以上の仮定から、各個人は、分布イメージを構成することができる。

本稿では、分布イメージ自体に関心があるというよりは、こうして形成されたイメージから、社会の不平等度をどのように認知しているかに焦点がある。そこで次に、分布イメージから社会の不平等度をどのように認知していくのかについて、検討する必要がある。

はたして階層イメージ上では、社会的不平等をどのように捉えればいいのかだろうか。FK モデルでは、多次元階層構造を一次元の階層構造へと縮約している。それゆえ、多次元階層構造上での社会的距離は、階層イメージ上では意味を持たな

い。例えば、2ランク×2次元の場合、HH の人の階層イメージは HH、HL、L となるが、L をひとくくりとしているので、LH と LL の間には距離が存在しないと見なしている。さらに、HH、HL、L という区分をしていることによって、多次元であること自体が個人のイメージの中では意味を持たず、上から1番目、2番目、3番目という順番のみが重要な情報である。そうであるならば、個人のイメージ上では、階層間の距離が一定であると考えることが合理的となろう。つまり、1番目と2番目の認知上の距離は1、1番目と3番目の距離は2という具合である。さらにこの距離は社会的距離として考えることもできるが、社会的地位（威信や財産など）の大きさの違いと捉えることも可能である。1番目と2番目は1という単位の社会的地位の違いがあるとも考えられる。そうすると、階層イメージが単に階層の構成のあり方だけではなく、財の配分イメージとしてあらわれてくる。具体例を挙げると、イメージ上で5つの階層に分かれているとしたら、上から5、4、3、2、1という財が配分されていると考えることができる。

[仮定 6]

- (1) 階層イメージ上における階層間の距離は、等間隔である。
- (2) 階層イメージ上の財の配分は、階層間の距離に比例しており、上位になるほど財の配分が多い。

個人が社会の財の分布イメージを形成することができたら、そこから社会の不平等度の程度を評価することができる。ここで社会の不平等の度合いについては、さまざまな指標が考えられる。その中でも、結果の不平等の程度をあらわす最も代表的な指標は、ジニ係数であろう。それゆえ、本稿では人々が階層イメージを形成すると同時に、そのイメージから、ジニ係数を導出することによって社会の不平等の度合いを評価すると仮定しよう。人々が実際にジニ係数を求めていると考えることについては、現実離れしているとの批判もありうるだろう。もちろん実際にジニ係数を求めていると仮定することには、大いに無理がある。しかし、ジニ係数と相対的剥奪の間には関連がある

といった議論 (Yitzhaki 1979) から、人々の社会全体の不平等感がジニ係数のような不平等指標の関数になっていると考えることはできるだろう。

[仮定 7]

人々は、階層イメージ上の階層構造の社会の不平等度を、ジニ係数によって判断する。

3. 社会的不平等の認知の分析

本来であれば、解析的に分析することが望ましいが、本稿では残念ながら、そこまでの分析に至っていない。そこでモデルの挙動を確認し、不平等度を人々がどのように認知しているのかを検討するために、数値例によって検討したい。まずは準拠集団の階層構造を3ランク×1次元とし、準拠集団内の階層構造を3ランク×2次元とした、階層構造における階層帰属意識の分布と、分布イメージおよびそこから導かれる社会不平等の認知について検討してみることにしよう。例えば、HML という階層的地位は、準拠集団の第1次元のランク、M は準拠集団内の第1次元、L は準拠集団内の第2次元を指している。

まずベースラインモデルとして、すべての準拠集団が同比率、すべての準拠集団内の階層が同比率の場合を考えてみることにする。このときの分布イメージは、FK モデルにおける3ランク×3次元の場合に完全に一致する。それゆえ階層帰属意識の分布は図3のようになり、中意識が膨らむ、歪みのない分布となる。これは FK モデルか

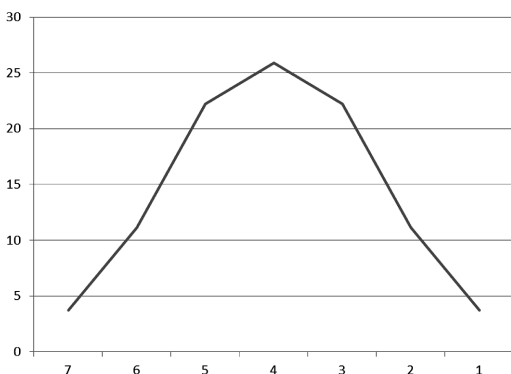


図3 一様分布の場合の階層帰属意識分布

ら導かれた命題と一致する (高坂 2006; 白倉・与謝野 1991; 与謝野 1996)。

次に、準拠集団の構成比率が変化する場合を考えてみよう。準拠集団は H、M、L の3つの集団に分かれているが、H 集団の比率を変化させて、M、L については H の比率を引いた残りの比率を等分にする。注意しておきたいのは、準拠集団内の各階層の比率の合計値、つまり全体社会における HH から LL までの構成比率は変化させていないということである。それゆえ、全体の階層構造は変化せず、人々が所属する準拠集団の大きさが変化したときの階層帰属意識の分布の変化を検討することになる。

図4は、準拠集団 H の構成比率を 0.1、0.3、0.5、0.7 に変化させたときの、階層帰属意識の分布をあらわしている。図から、次の知見が得られる。つまり第1に、準拠集団の構成比率が変化すれば、階層構造が変化していなくとも、階層帰属意識の分布は変化していく。第2に、準拠集団 H の比率が増加するに従って、階層帰属意識の分布が正の歪みを持つようになる。

これらの知見は、数理モデルとしては特段目新しい発見ではない。数学的には、3ランク×3次元の階層構造と、1次元の準拠集団の階層構造+2次元の客観的階層構造は同等であるのだから、H の比率が高まれば、正に歪んでいくのは、当然である。

しかし、その意味するところは興味深い。それは、客観的な階層構造が変化しないとしても、自己認知としての準拠集団の構成が変化することによって階層帰属意識が変化するからである。例え

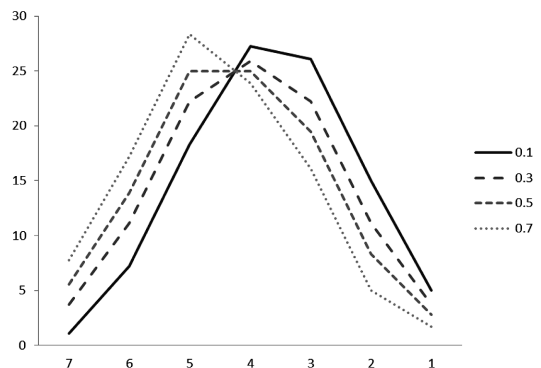


図4 準拠集団 H の比率の変化にともなう階層帰属意識分布の変化

ば、勝ち組－負け組、富裕層－貧困層という形で、集団を過度に分割するような言説が広く広まれば、人々はそうした集団分割によって自己の位置を規定してしまうかもしれない。もしそのようなことが起きているとするならば、認知上の負け組の規模が大きくなれば、客観階層の構成に変化がなくとも、階層帰属意識の分布は負に歪んでしまう可能性があるのである。これは先に述べた水牛の「人々の将来への不安心理を反映したもの」という主張にも対応している。現在の自分の客観的地位が変わらないとしても、将来への不安から「落ちるかもしれない」という思いを抱くことがあるとしよう。このとき、自分を相対的に「下」の集団に所属させてしまうかもしれない。そのような集団が大きくなると、社会全体の階層帰属意識の分布は、下方に偏ることになる。

さらに、準拠集団の同質性の効果のみをみよう。上記の例においては集団に階層性があることを想定していたが、集団内の階層構造は、集団によって違いがないことを仮定していた。しかし、前述しているように、準拠集団であるならば、集団ごとにある程度同質性があるはずである。そこで、次のような状況を設定してみることにした。

準拠集団 H、M、L のうち、H 層内の HH、HM、HL の比率が M 層、L 層よりも高く、LH、LM、LL の比率が低い。逆に L 層内の HH、HM、HL の比率は低く、LH、LM、LL の比率は高い。こうした状況を設定するために、次のように階層分布を仮定する。

- (1) すべての階層的地位が同比率となる chance society を考える。
- (2) H 層内の HH、HM、HL および、L 層内の LH、LM、LL の比率は、同比率の場合に比べて $(1 + \alpha)$ 倍となっている。
- (3) H 層内の LH、LM、LL および、L 層内の HH、HM、HL の比率は、同比率の場合に比べて $(1 - \alpha)$ 倍となっている。

このように想定するならば、準拠集団 H 層には、相対的に H* 層が多く、L* 層が少なくなり、逆に L 層には、相対的に L* 層が多く、H* 層が少なくなる。

α を 0 から 0.8 まで変化させたときの、階層帰

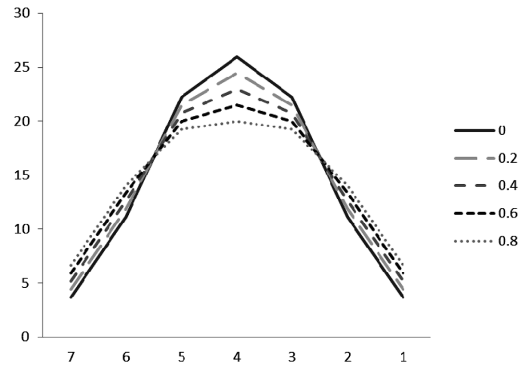


図5 準拠集団の同質性と階層帰属意識分布

属意識の分布が図5である。

図5から、 α の値が大きくなるに従い、中のふくらみが小さくなり、上、下の比率が高くなっていくことがわかる。

ここでは、1つの数値例によってのみ分析したに過ぎないので、過度な一般化はできないが、社会が同質な人々によって分割され、同質化した集団を形成していくほど中意識は減少していく。つまり、総中流化とは逆の事態が生じる。それは逆に言えば、多様な人々によって構成される集団によって社会が分割されている社会ほど、中意識は肥大化するのである。

以上の結果をまとめると以下のようになる。

[知見 1]

- (1) 準拠集団によって分割された社会においても、階層帰属意識の分布は「中」が膨らむ。
- (2) 客観的階層構造が変化しなくても、準拠集団の大きさが変化すると、階層帰属意識の分布も変化する。
- (3) 準拠集団内の同質性が高まると、中意識は減少する。

次に、分布イメージについて検討してみよう。

社会的距離の定義から、 r ランク \times s 次元の階層システムにおいて s 次元目のランクの違いは社会的距離の違いにつながらないことは、先の仮定で述べたとおりである。それゆえ、準拠集団の階層構造を 3 ランク \times 1 次元とし、準拠集団内の階層構造を 3 ランク \times 2 次元とした階層構造の場合、準拠集団の次元 (1 次元) と準拠集団内の第 1 次元によって、社会的距離が決まる。そのた

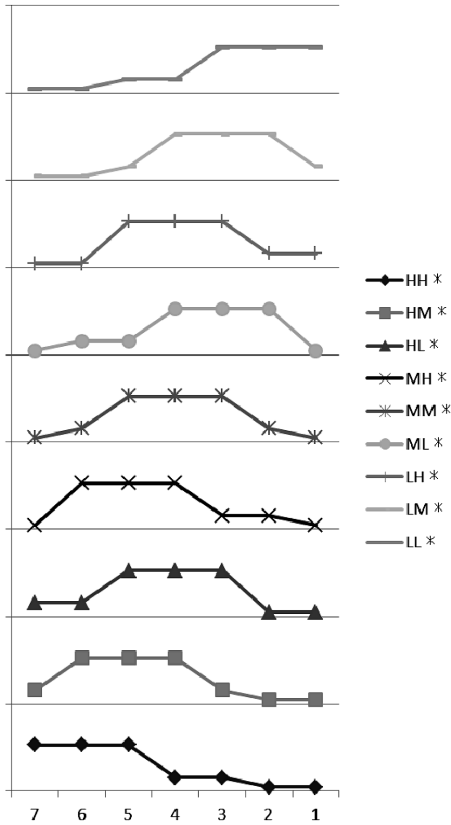


図 6.1 階層分布イメージ ($q=0.1$)

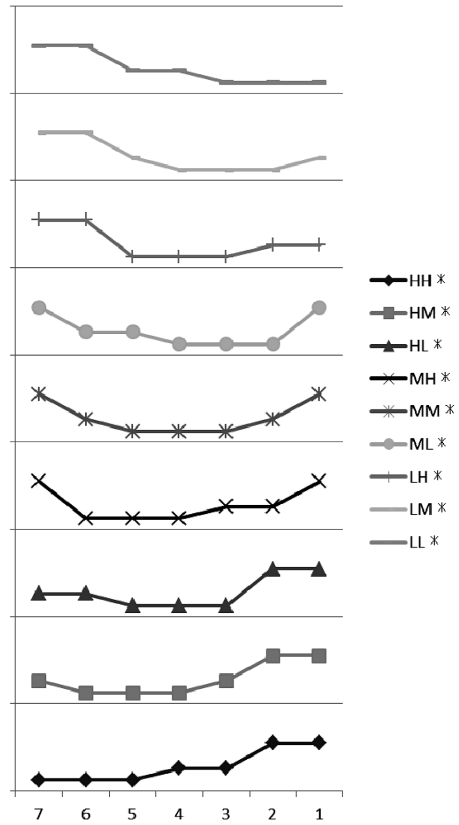


図 6.2 階層分布イメージ ($q=0.7$)

め、各階層的地位によってイメージされる分布イメージの違いもまた、準拠集団の次元（1次元）と準拠集団内の第1次元によって決まっている。

そこで、最初にそれぞれの階層的地位の個人が持つ分布イメージを求めた（図5）。分布イメージは、「準拠集団の第1次元+準拠集団内の第1次元」の組み合わせにより、準拠集団の第1次元がHであり、準拠集団内の第1次元がHとなるHH*から、準拠集団の第1次元がLであり、準拠集団内の第1次元がLとなる。LL*までの9パターンになる。

図6.1は、 $q=0.1$ のときのHH*層からLL*層までの各階層的地位の分布イメージである。図では、階層分布の形状がわかるように、それぞれの階層的地位の分布イメージを縦に並べている。なお、各階層的地位の分布イメージ上の階層構成数は同じである。またx軸は最も低い階層的地位から1、2、3…となっている。図6.1からわかるように、自分の階層に近いほど、高い比率であ

る。しかし、 q の値が大きくなるに従って、自分の階層に近いほど、構成比率は低くなり、遠い階層ほど高くなる。図6.2は $q=0.7$ の場合の分布イメージである。つまり階層イメージ上の構成比率は、相互作用確率と階層イメージ上のそれぞれの階層に含まれる客観階層数の相対的な大きさによって決まっている。

次に、財の配分イメージを求めてみよう。

まず、各階層的地位における財の配分分布をあらわしたのが、図7.1、図7.2である。例えば $q=0.1$ のときHH*層にとっては、一番目の層から3番目の層に財が集中しており、4番目以降の層には財が配分されていないことがわかる。逆に $q=0.7$ のときは、自分の階層の財の配分比率は低くなり、自分の階層よりも遠い階層の配分比率が高くなっている。

さらに、この財の配分状況から、ジニ係数を求める。階層イメージ上の階層は7つの層に分かれているので、最上位の層に属する個人から7、6

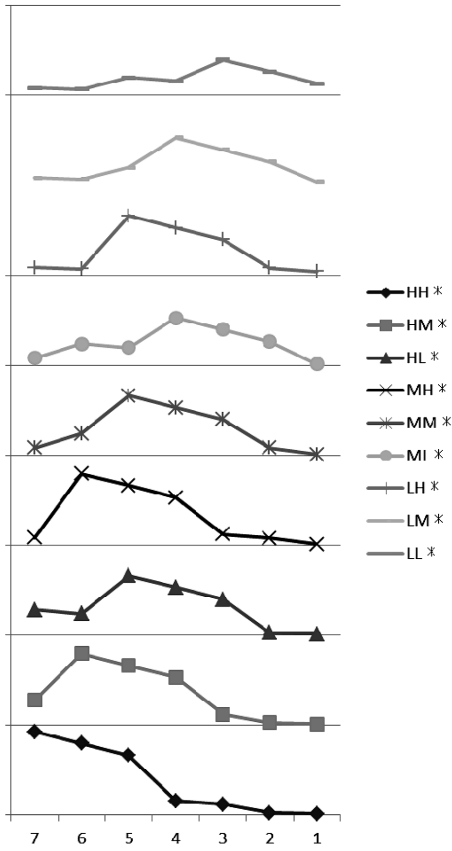


図 7.1 財の配分 ($q=0.1$)

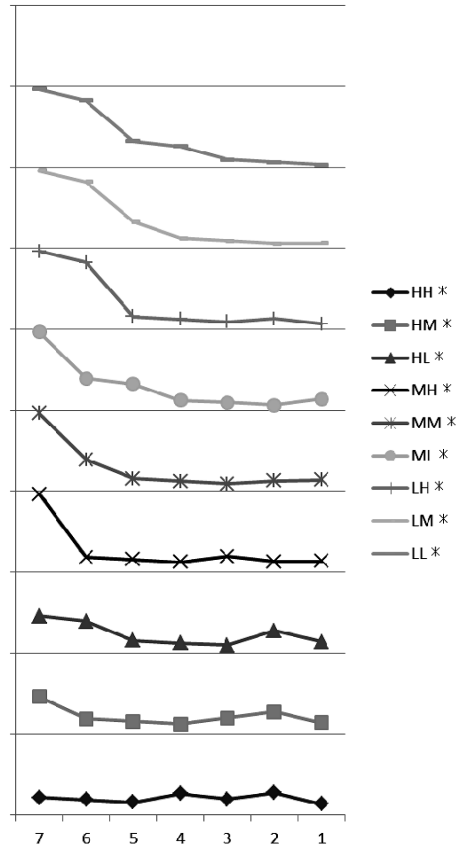


図 7.2 財の配分 ($q=0.7$)

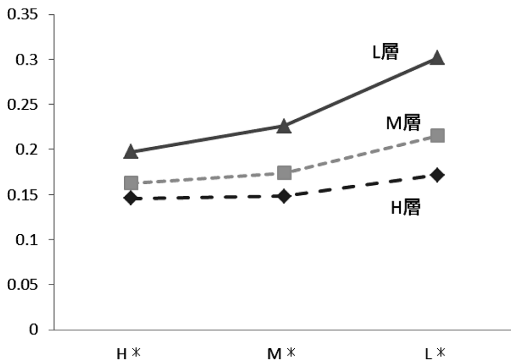


図 8 準抛集団別、各階層的地位のジニ係数 ($q=0.1$)

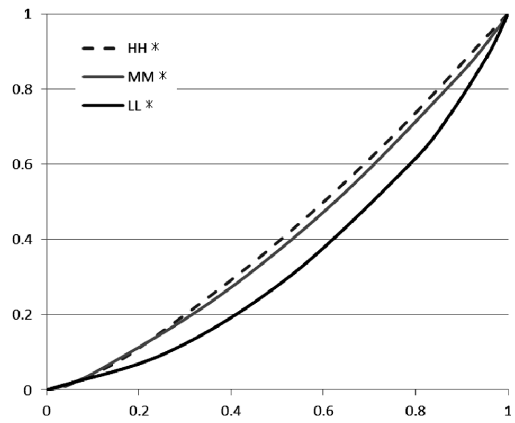


図 9 ローレンツ曲線

…2、1の財を保有しているとする、ジニ係数を求めることができる。

図8は、 $q=0.1$ のときの各準抛集団別の階層的地位的階層イメージから求められるジニ係数の値の変化をあらわしている。またHH*層、MM*

層、LL*層について、ローレンツ曲線を描くと図9のようになる。図9からもHH*層よりもMM*層、MM*層よりもLL*層のほうが不平等な社会であると認識していることがわかる。

次に、相互作用確率を決める距離係数 q を

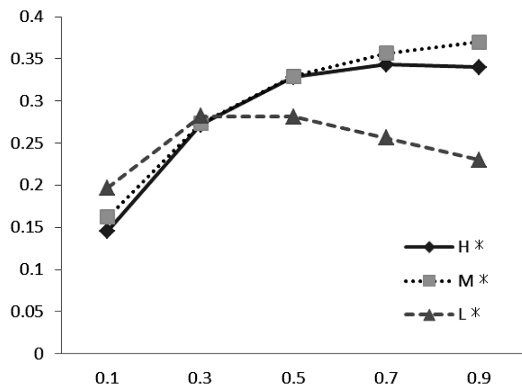


図 10.1 相互作用確率とジニ係数 (準拠集団 H 層)

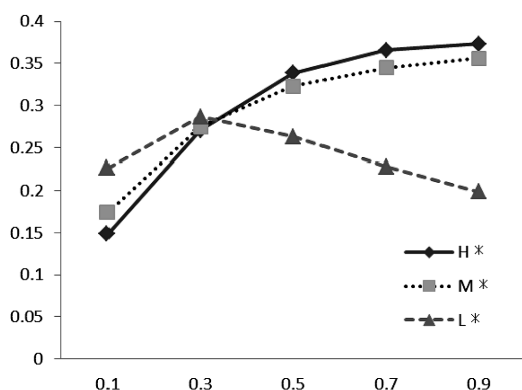


図 10.2 相互作用確率とジニ係数 (準拠集団 M 層)

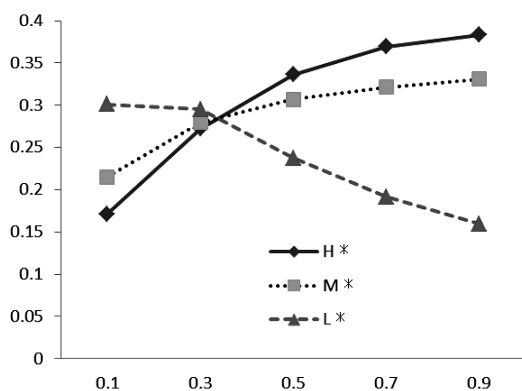


図 10.3 相互作用確率とジニ係数 (準拠集団 L 層)

0.1、0.3、0.5、0.7、0.9へと変化させてみたときのジニ係数の変化を、準拠集団別にそれぞれの階層的地位別に求めた。

図 10.1 から図 10.3 から興味深い知見が得られる。第 1 に、どの準拠集団においても他の階層との相互作用が小さい社会では、低い階層的地位の

者において不平等を大きく感じているが、相互作用が高くなると、高い階層的地位の者において不平等が感じられるようになる。そして図 10.1 から図 10.3 の場合には、 $q = 0.3$ のあたりで差が最小になる。第 2 に、下位の準拠集団ほど、準拠集団内のジニ係数の値の違いが大きいの。もちろん $q = 0.3$ 近傍では差が無くなるが、差がある場合には下位の準拠集団での値の差が大きくなっている。

[知見 2]

【分布イメージ】

(1) 階層イメージ上では、相互作用確率が低い時には、自分の所属する階層的地位の構成比率が高くなるが、相互作用確率が高くなると、自分の所属する階層的地位の構成比率は低くなる。

【社会の不平等性】

(2) 他の階層的地位との相互作用確率が低い社会においては、準拠集団の階層的地位が低くなるほど、不平等度は高くなり、他の階層的地位との相互作用確率が高い社会においては、準拠集団の階層的地位が高くなるほど、不平等度が高くなる。

(3) 他の階層的地位との相互作用確率が低い社会においては、準拠集団内の階層的地位が低くなるほど、不平等度は高くなり、他の階層的地位との相互作用確率が高い社会においては、準拠集団内の階層的地位が高くなるほど、不平等度が高くなる。

次に、準拠集団の数の増加について検討してみることしよう。

単純化のために、準拠集団内の階層数は、3 ランク×2次元とする。準拠集団数は 2 から 5 まで変化させ、相互作用確率 q は 0.1、0.3、0.5、0.7、0.9 の場合について検討した (準拠集団は一次元であると単純化している)。このときの、ジニ係数が最大値となる階層的地位の値と最小値の階層的地位の値の差を図示すると、図 11 のようになった。

この図から、2 つの傾向が読み取れる。第 1 に、準拠集団数が多いときのほうが、少ないときよりもジニ係数の差は大きくなる。つまり、不平等の認知の階層差が大きくなる。しかしその差は

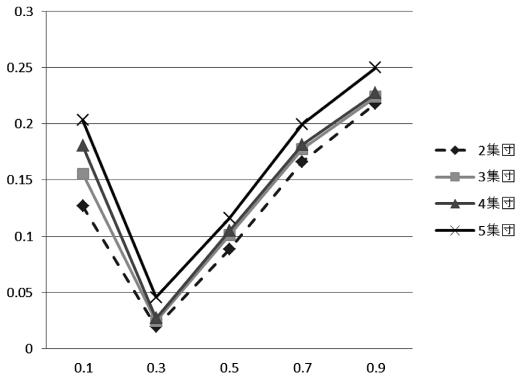


図 11 ジニ係数の差 (準拠集団数の変化)

あまり大きくない。第2に、相互作用確率が一定の値までは(図11の場合では0.3)、相互作用確率が大きくなるに従って、ジニ係数の差は小さくなっていくが、ある値以上では、相互作用確率が大きくなるに従って、ジニ係数の値の差は大きくなっていく。階層間の相互作用が小さすぎても、逆に大きすぎても社会の不平等度に関する認識の、階層的地位間のずれは大きくなるのである。

[知見3]

- (1) 準拠集団数が多くなるほど、人々の抱く不平等の程度の、所属階層による相違は大きくなる。
- (2) 準拠集団数に関係なく、相互作用確率が一定の値までは、相互作用確率が大きくなるに従って、人々の抱く不平等の度合いの、所属階層による相違は小さくなっていく。
- (3) 準拠集団数に関係なく、相互作用確率が一定の値を超えると、相互作用確率が大きくなるに従って、人々の抱く不平等の度合いの、所属階層による相違は大きくなっていく。

さらに、準拠集団内の階層数(ランク数)の増加について検討してみることにしよう。準拠集団内の階層数(ランク数)とは、結局客観階層における階層数と一致している。

ここでも単純化のために、準拠集団の階層数を3ランク×1次元、準拠集団内の次元数を2次元に固定しておく。その上で、準拠集団内のランクを2から5まで変化させたときの、階層イメージ上でのジニ係数の変化を求めた。先ほどと同様

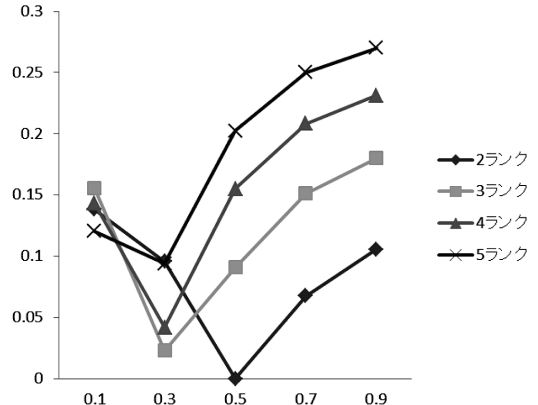


図 12 ジニ係数の差 (準拠集団内ランク数の変化)

に、ジニ係数が最大値となる階層的地位の値と最小値の階層的地位の値の差を求めた。図11から読み取れるように、相互作用確率が低いときには、ランクの違いによるジニ係数の値の差は小さい。しかし、相互作用確率が大きくなる(図12では0.5を超える)と、ランク数が大きくなるに従い、ジニ係数の差が大きくなっていることがわかる。このことは、客観的に社会の分割が進むほど、階層間における不平等の認識に相違が生じることを示している。

[知見4]

- (1) 客観階層上のランクが増加すると、イメージ上の社会の不平等度は、全体的に高まる。
- 【ランクの増加効果】**
- (2) 相互作用確率が低い社会では、階層的地位間の社会的不平等の認知の違いは、ランクの増加とほとんど関係がない。
 - (3) 相互作用確率が高い社会では、階層的地位間の社会的不平等の認知の違いは、ランクが増加すると大きくなっていく。

【相互作用確率の増大効果】

- (4) 相互作用確率が、一定以下のときは、相互作用確率が大きくなるに従って、階層的地位間の社会的不平等の認知の違いは、小さくなっていく。
- (5) 相互作用確率が一定以上のときは、相互作用確率が大きくなるに従って、階層的地位間の社会的不平等の認知の違いは、大きくなっていく。

4. 結論

本稿では、大きく分けて2つの課題を検討してきた。

第1に、階層帰属意識への準拠集団の効果がどのようなものであるかを検討した。そこで得られた重要な知見の一つとしては、準拠集団内の多様性が高まる（低くなる）と、階層帰属意識の分布において中が増大する（減少する）ということであった。社会の不平等をあらわす一つの指標として階層帰属意識を考えたとき、おそらく中が増大する（総中流化する）ということが、社会の不平等度が小さくなったことの一つの指標として見られていた⁹⁾。こうした見方に従えば、人々が準拠する集団の多様性が高まることこそが、社会の平等化に対応しているということになる。同じような階層的地位によって構成された集団ではなく、多様な階層的地位によって構成された集団が準拠集団になることによって、社会は平等化していく。それは中意識論争において、地位の非一貫性が大きく取り上げられたこととも対応しているだろう。つまり、社会がさまざまな属性を持つ人々によって構成され、そうした人々によって集団が形成されることこそが、社会の平等化につながっていると考えることができる。

第2に人々の社会的不平等の認知に焦点を当て、その認知が客観階層上の位置によってどのような違いがあるのかを検討してきた。

この分析の最も重要な知見として、客観階層上の地位、また自らの準拠集団の違いによって、社会的不平等度の認知が異なるという点が挙げられる。政策論議をする際、我々は社会を俯瞰し、どこに不平等が存在するのかを見極めることで、どのような政策が有効なのかを考えるだろう。高齢者において不平等が大きいことがわかれば、高齢者の不平等をいかにして減少させるかが大きな課題となる。もちろんそうしたアプローチも重要である。しかし同時に、高齢者自身によって社会の不平等がどのように見えているのかということもまた、どのような政策を実施していくかを考える

際には、重要な要素となる。人々が世の中を不平等な社会として見ているのだとしたら、仮に個人々の財が増えるような政策を施したとしても、そうした政策は支持されず、社会も安定しないだろう。

もちろんこれまで、政策を考えていく際、人々の認知、評価の視点がなかったわけではないだろう。しかし、おそらく貧しい者、社会的に持たざる者の不平等度が高いと、我々は暗黙の内に考えているところがないだろうか。しかし、本稿のモデルからは必ずしもそうとは限らないことを示した。単純に貧しい者が、社会の不平等度を強く感じているわけではなく、条件によっては、高い階層的地位の者において、不平等度が高くなる場合もある。そして社会の不平等度の認知は、準拠集団の数、相互作用確率、客観階層の数によって影響を受けている。特に相互作用確率については、興味深い知見が得られている。単純な線形関係ではなく、相互作用確率が高く（あるいは低く）なれば不平等の認知が低くなるというものではない。こうした知見は、単に客観的な不平等の度合いを減少させればそれだけでよいというわけではないことを示唆している。

もちろん本稿での分析は、いくつかの数値例に基づくものであり、どこまで一般化できるかは、今後の課題である。本稿の分析によって、我々はいくつかの問題提起をおこない、社会的不平等の度合いの認知に関する議論の端緒を示したに過ぎない。しかし今後、詳細かつ精緻な分析をおこなうことによって、客観的な階層構造と人々の社会的不平等の認知の関係を明らかにすることができるに違いない。そのことによって、階層意識研究は、単に階層と意識の間の関係を明らかにするだけでなく、階層が意識にどのようにつながっており、また社会全体の評価につながっているのかを示すことから、階層構造の再帰性という課題へとつながるに違いない。

参考文献

文春新書編集部編. 2006. 『論争 格差社会』文芸春秋.

9) ここでいう社会の平等化とは、研究者から見た社会の平等化である。

- Fararo, T. J. 1973. *Mathematical Sociology: An Introduction to Fundamentals*. New York. John-Wiley & Sons.
= 西田春彦・安田三郎監訳『数理社会学』(I, II) 紀伊国屋書店.
- Fararo, T. J. and K. Kosaka. 2003. *Generating Images of Stratification*. Kluwer Academic Publishers.
- 浜田宏. 2001. 「経済的地位の自己評価と準拠集団- δ 空間モデルによる定式化-」『社会学評論』52(2): 283-299.
- 星敦士. 2000. 「階層帰属意識の判断基準と比較基準-準拠枠としてのネットワークの機能-」『社会学評論』51(1): 120-135.
- 飯田善郎. 2009. 「相対所得における他者とは誰か-アンケート調査から-」『京都産業大学論集. 社会科学系列』26: 131-156.
- . 2011. 「相対所得におけるリファレンスグループの選択とその動機」『京都産業大学論集. 社会科学系列』28: 1-23.
- 石田淳. 2011. 「相対的剥奪と準拠集団の計量モデル-Yitzhakiの個人相対的剥奪指数の応用-」『理論と方法』26(2): 371-388.
- 吉川徹. 1999. 「「中」意識の静かな変容-意識評価基準の時点間比較分析-」『社会学評論』50(2): 216-230.
- 小林大祐. 2004. 「階層帰属意識に対する地域特性の効果-準拠集団か認識空間か-」『社会学評論』55(3): 348-366.
- 高坂健次. 1991. 「階層構造の分布イメージに関する原始モデル」『関西学院大学社会学部紀要』63: 319-336.
- . 2006. 『社会学におけるフォーマル・セオリー(改訂版)』ハーベスト社.
- Kosaka, K. and T. J. Fararo. 1991. "Self-location in a Class System: A Formal-theoretical Analysis." in Lawler, E. J., B. Markovsky, C. Ridgeway and H. A. Walker (eds.) *Advances in Group Processes*. Vol. 8. JAI Press.
- 前田豊. 2011. 「識別過程を考慮した階層帰属意識の数理モデル-比較準拠集団を組み入れたFKモデル-」『理論と方法』26(2): 303-320.
- 水牛健太郎. 2006. 「はじめに」文春新書編集部編『論争 格差社会』文芸春秋: 7-16.
- 佐藤香. 2008. 「格差・不平等をめぐる意識の規定要因-誰が格差を感じているのか-」土場学編『公共性と格差』(2005年SSM調査シリーズ7): 89-105.
- 佐藤俊樹. 2006. 「爆発する不平等感-戦後型社会の転換と『平等化』戦略-」白波瀬佐和子編『変化する社会の不平等-少子高齢化にひそむ格差-』東京大学出版社: 17-46.
- . 2009. 「階層帰属の意味論-自省の近代における「階層帰属」-」『社会学評論』59(4): 734-751.
- . 2011. 「転態する階層帰属-階層化社会の「見え姿」をめぐる-」齊藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会3 流動化のなかの社会意識』東京大学出版社: 3-16.
- 白倉幸男・与謝野有紀. 1991. 「階層認知と階層意識-階層認知の数理モデル-」『理論と方法』10: 37-54.
- 数土直紀. 2009. 『階層意識のダイナミクス-なぜそれは現実からずれるのか-』勁草書房.
- . 2010. 『日本人の階層意識』講談社.
- 轟亮. 2011. 「階層意識の分析枠組-価値意識を中心として-」齊藤友里子・三隅一人編『現代の階層社会3 流動化のなかの社会意識』東京大学出版社: 79-91.
- Yitzhaki, S. 1979. "Relative Deprivation and the Gini Coefficient." *Quarterly Journal of Economics* 93: 321-324.
- 与謝野有紀. 1996. 「階層評価の多様化と階層意識」『理論と方法』11(1): 21-36.

Images of Social Stratification and Perceptions of Social Inequality

ABSTRACT

Since the start of the twenty-first century, the widening societal gap has been a topic of debate in Japan, but we have seldom discussed the mechanism of people's perceptions of social inequality. This paper develops the Fararo-Kosaka model by examining the mechanism of the distribution of middle class consciousness and the perceptions of social inequality model. We analyze the model using group reference theory.

An analysis of this model resulted in the following findings: (1) the ratio of middle class consciousness increases proportionate to the diversity in the reference group; (2) the degree of social inequality in the perception system varies according to the difference in position in the objective hierarchy and his (or her) reference group. The unequal degree in the perception system does not necessarily decrease even if the objective unequal degree is decreased. So, we have to consider the difference and change of unequal degree of each class people in the perception system, if we draw up the policy for a gap widening society.

Key Words: image of social stratification, social inequality, reference group, Gini coefficient